

白山ふるさと文学賞

第二回 白山市ジュニア文芸賞 受賞作品

【暁烏敏部門】〈母へのおもいに関する作文〉

小学生高学年の部 優秀賞

母と私

北陽小学校六年

やまごき 山崎

あかね 朱音

受賞の言葉

すばらしい賞をいただくことができ、ありがとうございます。

「母と私」は、母にほめられた日と、おこられた日とで気持ちが変わり、何回も何回も書き直しました。

受賞を聞き、早く母に知らせたいと、とてもうれしかったです。ありがとうございます。

私は母と二人三脚で柔道を頑張っています。

母はいろんな本を読み、たくさんの人から話を聞き、良い環境で柔道ができるように頑張ってくれています。自分で考え、取りくめた練習では、帰りの車の中でほめてくれます。

母と私の気持ちが一緒だとうれしく感じます。

逆にもちろん練習は頑張っているのですが、何の心がまえもなく、取りくんだ日は決まって帰りの車の中で延々とダラダラおこります。

母は柔道のことは分からないので技などの注意はしませんが、長い話をした後、結局最後同じことを言います。その内容は「せっかく練習に来たのだから一分一秒むだにするな。」や「教えてくださっている先生と一緒に練習できる仲間に感謝をして練習ができていたか。」です。心がまえなどは私の心の中のことなのでいつも通りの練習の中でどこを見て違いに気づいているのか不思議です。さすが母です。

試合でもきびしさは同じです。負けてくやしい時、「今日まで頑張った。よく頑張った。」とだきしめてくれます。負けたのに、自分はこのままでいいんだと自信をもらえます。良い成績がとれて、ほめてもらおうとうれしくなると母の元へ走っていくと良い成績でも母にほめてもらえない時があります。それは、試合にかける努力があつたかどうかをしつかりみてくれているからです。たとえあまり良くない成績でも「今までよくがんばった。」といわれれば、「努力すればだれかが必ずみてくれる。」と思ひ、また頑張れます。それをみつめてくれるのはいつも母なのです。どんな時でも自分一人の力ではなく、先生、仲間、そして母の力があつてこそ今の自分であり、感謝する大切さを毎日忘れないで意識させてもらえる環境も今の私の柔道スタイルになつていてと思います。

私はいつも私のために頑張ってくれている母を全国大会につれていきたいと考えるようになりました。この全国大会は毎年、開さい地がちがいます。私の通っている柔道場からは毎年、出場者がいます。三年前は北海道、二年前は大阪府でした。「いいな、私も行きたいな。」と母はう

らやましそうに言っていました。そのころ私の心の中で「私が母を全国大会に連れていく」と考え始めました。

私が三年生の時でした。その時から母と私の二人三脚が始まった気がします。全国大会に出場できるのは、五・六年生で二階級あり各学年の優勝者のみです。県の一位にならないと行けないのです。私はそれまで一位になったことは一度しかありませんでした。それも小さい町の大会でした。「母は私のために私は母のために」早朝、二人で走ったりしました。毎日栄養バランスを考えた食事を作ってくれます。

それでもたまにそんな母をうるさく思い、反こうする時もあります。その時はおこられ泣いたり、もつと腹が立つ事があります。でも、あきることなく何回でも同じ言葉を言い続けてくれました。柔道を始めて八年間ずっと同じ事をくり返しても同じ言葉をくり返してきます。見捨てる事は絶対ありません。その積み重ねが精神面を大きくしてれているような気がします。

とうとう五年生の石川県予選の日がきました。母と練習したことを思いうかべながら試合にのぞみました。その結果、優勝することができました。母と勝ちとつた優勝です。全国出場です。鹿児島と一緒に歩いてほっとしました。母はうれしくてずっとなみだと笑顔でいっぱいでした。そして六年生の今年は広島です。

母へ：来週の全国大会の広島、楽しみですね。これからも、応えんよろしく願います。